

絵画史への旅

ゲーテの『イタリア紀行』を携えて 母袋俊也

ゲーテ著 高木昌史編訳

『ゲーテと歩くイタリア美術紀行』
青土社 二二、二〇〇円（税別）

ゲーテ生誕の地フランクフルト、マイン川沿いに建つシュテューデル美術館は、デュラー、グリューネヴァルトなどのドイツ作家はもとより、ファン・アイク、フェルメールらの名作を収集するドイツ有数の美術館である。来館者がアプローチに導かれ、最初に対応する作品は、ティツシュバインの『カンパニーヤのゲーテ』（本書裏表紙掲載）である。ここで描かれるゲーテは、つば広帽に古代彫刻の如く優美な襷のマントを被い、古代建造物の廃墟を背景に身を横たえている。マントの下からのぞく右足の形態には不自然さが残るものの、紛れもなくティツシュバインの代

表作であり、最も有名なゲーテの肖像である。当館は、ドイツ一八世紀後半、ゲーテの時代から導入する構成となっている。だが、C・D・フリードリヒや、P・O・ルンゲらドイツロマン派の作家の今日的評価からすると、ティツシュバインのこの破格の扱いは、むしろゲーテのイタリア旅行のもつ意味の大きさを逆説的に示しているともいえる。

この絵が描かれた一七八六年から八八年はまさにゲーテのイタリア滞在期である。ゲーテがかねてよりの憧れの地イタリア入りのためブレンナー峠を越えたのは一七八六年九月九日、それ以後一年八ヶ月、ヴェローナを皮切りにローマなど各地をめくり、古代神殿や、おびただしい数の美術作品を鑑賞していく。この南国での視覚体験は、ゲーテの視界を拡大させ、後にドイツ文化に決定的な影響を与えていくのである。この期間、異国の風土、

文化についてのありとあらゆる事柄を日記や書簡に書き記し、それらを三〇余年を経てまとめたものが『イタリア紀行』（一八一六）である。そこで記される内容は、地形、植物などの自然科学の分野から演劇、音楽の文化に関わる領域までと、その範囲は多岐にわたる。しかし、その中でも「眼の人・ゲーテ」の最も強い関心事は、何と言っても美術、殊にルネサンス美術に向けられている。

本書は、その『イタリア紀行』を中心に『芸術と古代』誌や『旅日記』などからルネサンス美術に対する記述を抜粋編纂、一・二部と地図などからなる結びで構成されている。

第一部は、ゲーテが実物鑑賞した時間軸に沿って、ティントレット、マンテーニヤ、ウエロネーゼ、ティツィアーノ、ミケランジェロ、ラファエロ、レオナルドの作品を『イタ

リア紀行』本文と『覚え書』から抜粋、ゲート自身の分量は決して多くはないものの作品との出会いの瞬間がライブ感を伴って生々しく伝わってくる。ここで注目したいのは、それぞれ美術論には編訳者によってゲートの古典的世界の後継者ブルクハルトのテキストが『チチエローネ』から添えられ、更に解説ではゲートも愛読したヴァザリーの『ルネサンス画人伝』、現代のルネサンス研究からパノフスキーの著作を引用し異なった時代の視点が提供され、作品とその背景などエピソードを混えて巧みに解説が加えられているため読者の作品鑑賞そのものへの理解を深め、重層化した比較研究は読者の知的関心を惹きつけていくのに大いなる成果をあげている。

第一部は『芸術と古代』からマンテーニャ、ヴェネツィア派、ジョットに関連した三篇を本邦初訳で紹介している。その含意あるエッセイ集は美術論として実に読み応えがある。巻末には地図、ルネサンス美術史、ゲートの年譜がそれぞれ同時代史併記で掲載されており、読者は図版を見、地図、年譜を確認し、

テキストに戻り、図版を見……と本書の中を幾度となく、まるで旅を楽しむかのように往き来することとなる。

さてここで第一章ティントレットを例に触れてみよう。ゲートが初めてイタリア絵画の大作を眼にしたのはヴェローナのティントレットの『天国』である。われわれの世紀とは異なり異国は遠く、情報、殊に視覚情報は模写、版画に限られていた時代、実作を目の前にした時の衝撃と感動は大きく、そのときの印象を「作品そのものを所有し、生涯目の前にしなければならぬ」と記している。ここからは作品を目の前に行っているこの時間を、永続的に確保したいという、眼の人・ゲートの欲求と切実さが生々しく伝わってくる。

ただ解説でも触れているが、ゲートが言及したこの作品はヴェネツィア、ドゥカレ宮殿の本作のために描かれた習作であったこの事實は、作品鑑賞の際しばしば生じる歴史（記述された）や作品評価そのものに対する疑念を想起させ、読者自身の眼による本作／習作の差異の比較へと促す。固定されている

と思われる歴史が流動性を持つていることは、ゲートが当地で見た『天国』が現在はパリ、ルーブル美術館にある事からも明らかである。

ちなみに評者は習作の優位を、旋回的な構図を印象づける雲海に、フリードリッヒの精神性の高い空間表現との類似性を、またその実現化に不可欠な光と色彩こそがゲートの最も強い関心事であったこと、更にシユタイナーのエーテル性との相関など、と想像を廻らしたのだが、このように歴史の余白に、読者の眼、感性による歴史の仮設化の余地を本書は許すのである。

本書『ゲートと歩くイタリア美術紀行』はタイトルが示すようにライブ感を伴った紀行文であり、美術鑑賞の案内書であり、ルネサンス絵画論、ゲートとブルクハルトの比較美術論でもある。この複数の観点を兼ね備え、読者の眼／感性を携えゲートの生きた二五〇年前へ、更にその二〇〇年前のイタリアルネサンスへと旅を誘っていくに違いない。